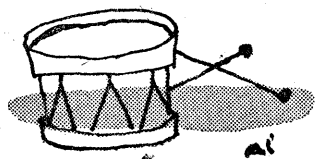


## 幼稚園における問題児とその指導



海 卓 子

### (例2)

はにかんていて、殆ど口を利かなかった子供を、友だちと協力出来るまでにした例。

幼児名 S、H、(男、昭和二三、一〇、

一五、生れ)

#### 指導

丸尾 ふさ

○ 集団生活の当初、問題となった点。

緊張して遊べず、名前を呼ばれて返事をするのがやっとで、殆ど口を利かない。

家庭では逆に「あばれん坊」になり、今までになく機嫌が悪く、一寸した事にも泣いて始終いらくしている。

○ 原因と思われる点。

Sは三人姉の末子で、兄は小学校一年、姉は年長組に在園している。父母は非常に教育に熱心であるが、一時、母の実家に同居していた事があるので、祖父母に甘やかされたようである。させれば出来ることも大人の手が多いためにいつしてやってしまい、いつまでも赤ん坊扱いにして庇って育てたことが原因のように思われる。

○ その扱いと経過について。

(四月～五月)

先づ園に於て、安定した気分で地金を出して遊べるようなキツカケを作ること。

そのためには、一人でもよいから「遊べる仲間」をつくること。始めはともかく不安感をなくすために、教師との接触を多くし、更に他のSと同様にまだ友だちと遊べない子供たちと一緒にして教師が仲間に入って遊び、極力何もしないで、ぼんやり見ていたりする時間を少くするようにした。友だちをつくるために、おいしく年長組にいる姉や、姉の仲間からも離すようにして、教師と、友だちへの親しみを増すようにしむけた。又同時にみんなの前で、何でもしつかり出来るとほめるようにして、自信をつけていった。

(六月～七月)

丁度六月の初に新しい園舎に引越し、年長組と分れたのを機会に、姉たちからは離れたが、未だ仲良しは出来ず、教師が中心になつて遊んでやらないと、友だちの遊びを指をくわえてみている。

「お店ごっこ」などをして、お金を持つて店の前に行くが、「コレチョウダイ」と云

えず立っている。傍から教師が「下さいな」と云つて買い、「Sちゃんは何れを買うの」と誘いをかけると、どうにか指さして買つて来るという始末である。

場面が理解出来るだけに、自分を意識することが強いので、夢中になって遊べるようにと、「狼ごっこ」をして、教師が床を這つて歩いたり、寝転がったりして馬鹿騒ぎをした。子供たちは部屋中大騒ぎをして逃げまわっていたが、二回目の時、「ホラ狼だ」という声に、小山羊たちは慌て、机の下にかくれ、やがてお母さん山羊が帰ってくると、Sは思わず机の下からとび出して、「ミンナペラレチャッタヨ」と夢中になって報告した。これを転機として、ガリバーごっこをする、コラ、ガリバー」と教師の手にぶら下り、やっと自然な姿が見られ生地を出して遊べるようになった。

今まで家庭では、不機嫌でやたらに乱暴をしていたが、この頃から、家に帰るや否や、幼稚園での報告をするようになった。けれどまだ、いたずらや、乱暴は同様であった。集団の中で、自分の思うように遊べるようになれば、家庭での遊びも自ら平常に復し、癪癪

を起すことも少くなると思うから、やたらに叱つたりしないで様子を見るように注意しておいた。

相憎やつと「芽」が出たところで夏休みを迎えることになったので、家庭には近隣から来ている同組の男児となるべく多く遊ばせるように連絡をとった。

#### (九月～十月)

夏休み中は親密さを失わぬように、教師と手紙の交換をしたりして、二学期を迎えた。最初の日はさすがに稍緊張していたが、ともかく「オハヨウ」と自分から云つた。但し多少の後退は避けられなかった。例えば、「汽車ごっこ」をしているので「のせてもらいましょうよ」と手をとつても、「イヤ」と云つて入らなかつたり、又登園をしぶり、「先生が待っている」と励ますと、漸く家を出るという始末である。

Sは又気が小さくて、一寸した事でもとても気にする。丁度雨が途中から降つて来た日新館から旧館に行くのに、「傘のある人は、ない人を入れていつてあげなさい」というとSは傘をひろげて友だちを待つていたが、「入レテイツテアゲル」と云えない中に、一

人ぼつちになり、泣きそうにしている。「先生入れてね。」あゝよかった。ぬれないで」と喜ぶと、やつと安心して涙をふく。Sにはまだこのような個人的な働きかけが必要である。

リズムの時、T子と二人が一番先に覚えたので、皆の前でもう一度させてほめると、嬉しそうにしていたが、其の後二人はいつも一緒に、帰りにSがT子を傘に入れて新館に帰った。この二人はこれがキツカケとなって仲良しになり、いつも隣同志に座ったり、肩を組んだり、抱き合つてシーソーをしたりしてあそぶようになった。この頃家庭でも、やつと姉から離れて、一人で遊べるようになった。

この組は積極的な行動をとる子供が多く、Sの外にも数人、気圧されていて遊べない子供があるので、この五人を保育終了後残して遊ばせてみた。M子やK男など今まで殆ど口を利かなかつたのに、「ソウジヲ手伝オウ」とキヤー／＼騒ぎながら、床拭きまで手伝いSは「早くアソボウヨ」と云い出す。「鬼ごっこ」や「馳けっこ」をして一時間ばかり遊んだが、帰りには「モウ帰ルー」とみんなつ

まらなそうであつた。次回は五人の外に、Sと同グループの積極的なメンバー三人を加えてみた。前回と同じく、三人の子供に気圧される事もなく、よく遊び、その中でT男やS男(積極的なメンバー)との交渉もかなりあつた。この頃になつて漸く、一人でどこへでも遊びに行き、以前のような乱暴や、不機嫌はなくなつて来た。

#### (十一月以降)

或朝、Sは登園するなり、「ツカマエルゾー」と部屋に居た十人位の子供を追いかけ始めた。皆は今までのSと全然違うので、面白半分「Sチャン、Sチャン」と手をたたいて逃げまわつた。これはSにとつて、対等の力関係で大勢のものと交渉を持ったわけではなかったが、Sに対する多少みそっかす的興味で相手にされたことがキツカケとなつて、自分から今まで遊んだことのない子供仲間に入つて遊ぶようになり、交友関係が広がつた。同時に「キシヤツクルンダヨ」「ココハオザシキダカラ靴ヌイテ上ルンデスヨ」などと、大きな声で呼びかけて人に指図をしたり、「オイKチャン、オニワデ遊ぶウゼ

「と誘つたり出来るようになった。

運動会で徒競走に二等をとつたのが、非常に嬉しかつたらしく、又自信もつたようである。十人位の仲間で一つのポイントになつて遊ぶようになったのも、これから間もなくであつた。男の子と自由に遊べるようになつたらT子のことはいつの間にか忘れてしまつたようである。

二月の修了式の時には、数人の仲間とステーズの上に立つて、修了児に大きな声で独りづゝお祝の言葉を送り、その真剣な態度に思わず涙ぐんだものである。

#### (例3)

自意識が強く、ひねくれていた子供を、安定した気持ちで友だちと遊べるようにした例。

幼児名 M、K(女、昭和二三、四、五、生)

#### 指導

伊井 澄子

○ 集団生活に於て、問題となつた点。

自意識が強く、思わせ振な態度をとつて、仲間から外れてしまうことが多い。例えば、整列の時に、「マガツテイル」と当番が注意をして直すと、一寸触つたのにも拘らず、

Aチャンガ、私ガ何モシナイノニブツタ」といつて泣き、これをキツカケに列に入らずすねて並ぼうとしない。周囲の者がなだめてもきき入れず、三、四十分ぐずっている。

#### ○ 原因と思われる点。

Mは長女で下に妹弟各々一人がある。父は理髪職で他に勤務し、いつも幼稚園の送り迎えをする程、子供を可愛がっている。母は勝気で、「お隣のBちゃんが出来るのだから、あなたに出来ないことはない」と云つて、Mを激励する。一つには勤人の多い地域に居る職人であることに強い劣等感を持ち、「負けものか」という頑張りの姿でもある。

親の劣等感がそのまゝ子供にも影響して、能力が普通以上であるにもかゝらず、前記のような行動をとるものと思われる。

#### ○ その取扱いと経過について。

すねた時には知らん顔すること。その反面、彼女の良さを、他の子供たちにも認めさせて、理由のない劣等感を除き、正しい認め方によつて、彼女の「認められたい気持ち」に満足感を与えること。これを指導のねらいと

して、先づ、Mのためによい友だちを選んでみた。Mを頭から見下すような坊ちやん型を避け、非常によく気がついて、積極的に動きながらも庶民的な感じのするT男を相手とした。

或日、M子は箱庭用の半坪程の箱の中に入つて遊んでいた。T男が通りかゝつて、  
「舟ネ舟ニシヨウ」M子はまめくしく中にござを敷き、T男は箒を竿に見立て、舟を漕ぎはじめた。M子の競争相手であるK子、O子が通りかゝつて、  
「スレテ」という。T男は  
「ウン、イイヨ」とうなづく。M子はこれに誘われて、  
「靴ハココニスグノネ」と機嫌がよい。  
「オ父サンハ一寸山ニ行ツテ来マス」M子  
「イツテイラツシャイ」  
「ミンナ、ココカラ上ツテネ」とお母さん気取りで指図をする。このようにして、いつもなら一度や二度は泣くのに、T男とのコンビではよい女房役をつとめる。M子  
「マタアシタモシヨウネ」と、このような遊びが毎日続き、見ちがえるように元氣になつていった。

このチャンスをとらえて、M子の弱点である「云いつけ口」「いちわる」をみんなの問題として取上げて話し合つた。

M子は自分より弱い相手に対しては、安心

感からか、非常に親切にするので、この事をみんなの前でほめて、特定の相手に対してする「いちわる」を封じた。

絵画、工作等はなか／＼巧いので、これも自信をつける手懸りとした。

M子の場合、親の問題が大きいと思われるので、一日母に保育の実際を覗いてもらつた。この時、同時に数人の母に来てもらつたが、M子の母親が劣等感を持たないように、それ／＼子供に問題があり、然も素直で、素朴な母親を選んだ。この数人の仲間では、M子が能力的に勝れているので、一応安心したものか、教師の忠告を素直にきき、自分の子供に対する過大の要求が、却つて子供を害つていることを、現場でよく／＼観たようであつた。

この後で雨具を届けながら、保育室を覗いたことがあつたが、いつもならば、M子だめでしょう」と口出しをするのに、黙つて観ていて、後で教師に雨具を渡していった。

連絡帳に子供の問題を記すと、いつでも、  
「家ではそんなことはない」と否定していたが、  
「繕う」必要はなくて、子供をほんとうによくするために、ありのまゝを報告しなく

てはいけなことがわかつたようである。

最近の記事に「今までは近所の子供と遊ばせずに、良い家のお子さんと遊ばせていたがお話を伺つて、やっぱり近所のお子さんもお事だと思ひ、みんなと遊ばせました。M子が嬉しそくに指図をして遊び、玩具も今まで貸しませんでしたが出してやつたらみんなで綺麗に片附けました」とある。

最近問題の「泣きおどし」は余りみられない。親の要求水準が高すぎると云う事は、子供を往々にして卑屈にしてしまう原因となつていことが有る様である。

#### (例4)

自己顯示が強く、あそびをまぜつかえしていた子供を、よいリーダーにした例。

幼児名 K、N、(男、昭和二三、四、一四、生)

○ 集団生活に於て、問題となつた点。

我儘で自分の思う通りにならないと乱暴をし、友だちに対しても威圧的である。又みんなが集っている時など、他人の注意をひきたくて、わざと統制から外れた行動をとること

が多い。

特に統率力があり、能力も高いので、Kの影響は非常に大きく、稀にKが欠席すると組全体の動きが異り、それ〴〵の子供が落付いて遊んでいる。

### ○ 原因と思われる点。

Kは妹一人で、Kが生れる前に長男が死亡している。このためにKに対する両親の期待は大きく、母は細心の注意をKの上に注ぎ、このため知らず〴〵甘やかしている。家庭に於けるKは生活の中心であり、従って性質は素直で開放的である。

### ○ その扱いと経過について

#### (一学期)

集団のまとまりが弱い時—一学期など—は、乱暴をされても、それに対して抗議をすることが出来ず、精々教師に云いつけに来るのが精一杯であった。このような時期には、抗議をするようにしむけながらも、教師がそれを直接解決してやらねばならず、従って個別の指導が多くなった。友だちとの交渉が深くなり、集団意識が芽生えてくるに従って

Kの起した問題は、一人の子供にとつてだけの問題ではなく、仲間にとつての問題となってきた。

#### (二学期—三学期)

砂場で数人が山を作っていたら、Kが突然これを壊した。それに対して「ダメダ」「切角作ッタノニ」と秩序を乱すものへの抗議は活潑になったが、それでも問題は教師に持ち込まれ「先生、Kチャンガイケナイノ」と訴えられた。このような時になるべく子供たちに批判させて答を出すように仕向けていった。

それにも拘らず、Kによる同様の被害は度重なり、Kへの追隨者も現れて、その場の調子にのつて雷動的に問題を起す子供も出て、Kを中心にした勢力は増大した。

教師は積極的に遊びに参加し、Kが横暴に振舞った時には、一応注意し、それでも我儘を返そうとする時には仲間から除外した。同時に、リーダーシップのとれるよいリーダーをそだて、彼を中心にした遊びのグループを拡大することにつとめ、「今日のあそびは面白かったか?。何故面白かったのであろうか?」と質問し、自分の云い分丈を主張する

ものがあると、面白く遊べないことをわからせていった。

こうして三学期には、組の中心的メンバーはKから離れ、Kの行動に対する批判も強く腕力でかなわない時には、集団でKに対抗する傾向も現れて来た。

一方、Kの得意とする大工作業をやらせたり、腕力が必要な時には特にKを起用して、全体の中でKの役立つ場を作り、その能力を他の子供にも認めさせて満足を与えた。

#### (年長組の一学期)

年長組になると、組の編成替えによって多少顔ぶれも変り、K自身もツベルクリン検査の結果、陽転したので欠席勝となり、休み明けの時などは、他人の遊びを傍観していることもあった。とは云え、問題は度々繰返されていた。

#### (年長組の二学期)

年長組になったので月に一、二回「相談会」を開き、自分たちの行動を反省させているが、この時にKはランボウシタリ、ケンカシタリシナイコトと云った。教師はさすが「Kはよいことに気がついた。これはみんなの約束にしよう」といって「みんなのや

くそく」とした。

二学期の半頃、Kは友だちを棒でなぐったが、その時、周りにいた者が、みんなでKをやっつけようとしたので、Kは門の外に逃げ出した。教師が呼びに行くと、「ミンナトアイタクナイ」という。「どうして？」「ミンナノヤクソクヤブツタカラ」といった。

「みんなのやくそく」殊に自分の発言で定めたことは、こんなにも強く響くものかと、指導の一つの方向が得られた思いであった。

数日の後、朝の集合の時にKはSと喧嘩をし、それは大したことでもなかったが、みんなの普段Kに対する不満が爆発してKに向った。

Sも同様に批判されたが、いつの間にかSの周囲には女兒が取囲んでSを慰め、Kは集中攻撃にあった。Kは尙も強気に「コッペパンカツコイ」などとぶざけてごまかそうとしたが、多勢に押えられ、みんなでKを廊下に連れ出してしまった。他の子供たちが整列してから、「Kをどうするか」について話合ふと、「手ヲシバッテ、納屋ニイレル」「木ニイワエツケル」等という発言があつたが、「そうしたらKはよくなるだろうか？」と反

問すると、みんな黙ってしまった。「今までのように、まちがったら注意してあげる」ということにした。

Kは今までになく大勢の子供たちから仲間外れにされ、特に一番仲良しのYが先頭に立つて自分をやっつけたということは、非常に大きなショックとなった。

この日の帰り際に、リーダー（二学期から始め、数人のグループから一人を組全体で選んで、組のリーダーとし、組の責任者とする）の選挙があつたが、いつもならば数票は入るのに、今日は一票も入らなかった。いつも票が少いと「僕リーダーニナンカナリタクナイ」とやせ我慢をいうKも、今日は首を垂れて何も云わなかった。

Kはこの事件後とても慎重で、稀に乱暴をしてもすぐに謝り、作業などの時も積極的に行うとする。「センセイ、僕コノゴロ、イデシヨウ」というので「こういうKが続けばいい。Kは自分の悪いところを直そうとしたからえらい」はげます。このような態度が二週間以上も続き、他の子供が「オ母サン、Kチャンハオトナシクナッタヨ」と報告する程であつた。

十一月初めには遂にリーダーに選ばれて、晴々しい表情で、みんなの前に立った。

こうして、Kにより妨害をされ、集団のまとまりが崩されたようであるが、結果的にみれば、Kがいた事によつて却つて皆が一致団結して之に当り、集団のまとまりを強めた結果となった。

## 六、結び。

以上簡単ながら問題児を、幼稚園生活という集団場面でも指導したらよいかという問題に重点をおいて記述した。

問題児の指導に當つて重要なことは、何を問題とするかということであろう。即ち問題とは教師が教育の上で大切だと考えている問題これから外れているものが問題であり、

時には教師の考え方に問題があつて、好ましいものを好ましくないものとして取上げるあやまちもあろう。従つて、問題児とする場合には、はたして之がどういう意味で問題となるかをよく吟味せねばなるまい。こゝに例示出来なかつたが、一応集団生活についていつているが、自覚のない行動、まわりの動きのまゝに、人の云いなり次第に動いてい

る子供を「問題児」として重視したいと思う。よいにしろ、わるいにしろ、浮草のように流れている行動は、はつきり方向づけられ  
たわるさと同様に、否更にそれにもまして注意を要するものと思われる。

問題となる行動は、その子供にそなわっているものばかりではなく、その子供を囲む周囲の条件によって引起されているものであつて、周囲の条件が変れば、行動自体に変化のある事は、指導事例を見れば明である。例えば事例4のKの行動の変化は、Kと組の子供との力のバランスがとれた時に、著しい。従つて、問題児の問題は、教師の指導によって問題児と集団が好ましい噛み合せをした時に解消するものと思われる。こゝに集団を対象として指導の意味があるといつても、その子供の、その集団の成育状態によつて、或時期には、個人指導に重点をおく事も云うまでもないことである。

更に細い事を附加すれば、集団の中で一人の子供に発表させたり、一人の子供を批判させたりする時には、必ず成功の見とおしを持つて行わねばならない。みんなの前で発表しうまく出来なければ、却つて自信よりも劣

等感を強めることとなり、批判によつて萎縮してしまえば、更に、問題をこじらせることにもなる。

薬にも投薬の時期と分量があるように、指導にも、適切な時期と適量の刺激とがある。やりなおしのきかない人間が対象である丈にささやかな経験をも生かして次の試みの指針としたいと希うものである。

#### (白金幼稚園)

28頁より 予定の時刻に帰園した。しかし何よりも嬉しく感銘したのはこども達の行動であつた。休憩所へあがるのに靴を組毎にキチンと揃えた。室内でも組毎にまるく坐つて、小さな膝の前におそろいのカバンとその上に帽子が重ねられてある。そして持つて来たおやつをハンカチの上にならべて、どれから先に食べようかと品定めしている無心なこどもの姿をそこに見たのである。

いもほりに出かける途中坂みちですべてころんでも泣き出さない。しかも鼻の先まで泥をつけてもハンカチで拭いて笑つてすませるのである。いものうねごとに四人宛ならんで掘りなさいというまでチャンと待っている。欲ばつてわれ先にと他人の分まで掘つて

いくのとは大違いなのである。掘つたみずみずしい自分の脚ほどあるのを先生こんなに大きいのがといちいち見せに来るのである。持つて来た手拭で作つた袋に一ぱいつめるとあとは見むきもしない。みんな並んで手を洗うとお弁当を食べる。たべたあとは紙屑どころじやない、御飯粒まで一つ一つ拾つてきれいに片ずけるのである。こうしたことはこどもだけの集団であるからこそできるのだと思う。自主的に行動する場を与えたことがこうした立派な行為となつてあらわれたのである。

帰つてから、迎えに出ていた父兄にこのことを報告したら涙をうかべてきいている親もあつた。

この話はこれで終るが、帰りのバスの中で、半ば眠りこけながらも膝の上に載せたおいもの袋を、しっかり小さな両手で抱いていた可愛い姿を、今でも思い出すのである。

#### (台東区立柳北小学校)